

文化芸術事業実習の試行的取り組みについての報告 —アジアンワールド・イン・グランシップの事例—

A report on trial of a course in practice of the management of art and culture :
A case of “Asian World in Granship”

小西 潤子
Junko KONISHI

（平成14年10月7日受理）

はじめに

博物館法施行規則では、学芸員資格の科目のうち3単位分が博物館実習にあてられている。静岡大学教育学部では、それを2単位分および1単位分の実習授業科目を組み合わせることにより、取得可能にしている。平成13年度まで、前者については社会教育実習ⅠおよびⅡと美術史調査実習が、後者については博物館実習ⅠおよびⅡと楽器博物館実習ⅠおよびⅡが科目として立てられていた。平成14年度においては、これまで1～2名程度であった芸術文化課程音楽文化専攻および学校教育教員養成課程教科教育学専攻音楽教育専修、その他から、学生計13名が学芸員資格を希望した。これを受けて、音楽教育講座として急遽2単位分の実習を設け、受入先を探す必要が生じた。

音楽を専攻する学生が将来学芸員になったときに高く要求されることのひとつに、イベント運営能力があげられる。もちろん、収蔵品の展示を主要な事業とする博物館においても、特別展覧会等の計画・実施、普及活動、広報宣伝などの事業に際して、イベント運営能力が問われる。しかし、「展示物」としての音楽の場合、来訪者と同じ時間を共有しつつ生成されるという性質をもつため、担当学芸員には、企画段階では予想しなかった事態にも対処するだけの能力が求められる。このことから、対象者には文化芸術事業の運営に参加するかたちでの実習が望ましいと考えた。また、昨今では博物館、図書館、美術館など、展示主体の施設においても音楽イベントや音を使った展示が盛んである。そこで、音楽専攻生以外の希望者にも同じ機会を提供することにした。

受入先として即座に候補と考えられたのは、(財)静岡県文化財団が運営にあたる静岡県コンベンションアーツセンター（愛称：グランシップ。以下、グランシップと記す）であった。地理的に静岡大学から近いことはもちろん、文化芸術の交流を大きな柱の1つとする施設であることが一番の理由であった。こちら側の主旨を伝えたところ、担当者からは即座に快諾され、その場で双方一致により実習対象イベントが決定された。それが、2002年8月11日から9月1日までの延べ21日間開催された「アジアンワールド・イン・グランシップ」であった。本稿は、その実習計画と成果の概要について報告することにより、教育学部生にとっての文化事業実習の有効性と、今後の実施に際しての課題について論ずるものである。

1. グランシップの概要とインターンシップ制度

グランシップは、静岡県が建設費及び土地取得費におおよそ705億円をかけて建設し、1999年3月に開館された総合的文化芸術施設である。その設置については、昭和61(1986)年度東静岡駅周辺整備調査に始まり、翌年の新都市拠点整備懇話会の提言を受けて計画が進められた。地域・国内外における学術、経済、文化及び芸術の多様な交流の促進と、新たな文化の創造発信を行うことを目的とし、(財)静岡県文化財団が管理・運営・受託を行っている。36,009㎡の敷地にそびえる建築面積13,647㎡の鉄骨鉄筋コンクリート造および鉄骨造建物は、建築家・磯崎新の設計によるもので、文化の海を航海する船を象る。延べ床面積が60,630㎡の内部は、自然光を採光できる高さ58m天井からなり最大約4,600人収容可能な多目的大ホール「海」、木目を生かし最大約1,200人収容可能な曲線的に配列された客席からなる舞台公演向けの中ホール「大地」、最大500人収容可能で6カ国語の同時通訳ブースを備えた会議ホール「風」、ライブ感あふれる設計による静岡芸術劇場のほか、楕円形の交流ホール、3室で構成される展示ギャラリー、最新のAVを装備した映像ホール、10人から400人くらいまでの大小19室の会議室などから構成されている。また、それを取り囲んで設けられた芝生とインターロッキングで仕上げられた14,531㎡の屋外スペース・グランシップ広場は、大ホールと一体化させての利用が可能である。県内外からのアクセスも確保されており、JR東海道新幹線静岡駅から一駅目のJR東海道線東静岡駅から徒歩3分であり、400台の自動車が収容可能な1時間100円の有料駐車場も整備されている。利用者の便を最大限図って、開館時間は午前9時から午後10時まで、休館日なしとなっている。これは、「気配り」「親切」「柔軟に」という運営側のモットー(財団法人静岡県文化財団 n.d.)とも連動する。

グランシップの来館者は、開館3年目におおよそ300万人に達した。利用率(実績日数/利用可能日数)は、平成11年度が62.0%、平成12年度が68.1%、平成13年度が71.2%となっている。そのうちには、年間35~45本の(財)静岡県文化財団の主催による自主企画事業も含まれている。運営事務局は、総務課(9人)、企画制作課(15人)、利用サービス課(12人)のスタッフから構成されている。また登録制のサポーター(ボランティア)約180人が、平常業務、イベント業務、撮影業務、託児業務にあたっている。以上のようなハード(建物)とソフト(人)を備えた国際的イベントにも対応できる総合的な文化施設は、全国的に見てもトップクラスだといえる。

(財)静岡県文化財団が今後の発展に向けて、検討課題としてあげていたことのひとつに、インターンシップ制度の導入があった。インターンシップとは、「学生が在学中に自らの専攻、将来のキャリアに関連した就業体験を行う制度」であり、文部科学省、経済産業省、厚生労働省、各経済団体が積極的に推進しており、創造性や自主性を備えた人材の新たな育成システムとして注目されている(関東地域インターンシップ推進協議会 2002)。インターンシップは、学生のみならず大学、企業にもメリットがある(表1)。今回の実習が受諾され、双方の連携のもとでスムーズな体制づくりが行えたのは、たまたま受け入れ先側の検討事項とこちら側の要望が合致したためでもあった。

表1 インターンシップのメリット（関東地域インターンシップ推進協議会 2002）

<p>◇大学◇</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 自主性、独創性のある人材教育ができる (2) 企業が求める人材の要件が明確になる (3) 地元産業や自治体とのコミュニケーションの効果 (4) 理論の実践による学習効果の向上 (5) 産業界とのパイプづくり (6) 産業界ニーズ、カリキュラムの向上 <p>◇学生◇</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 職業意識の形成 (2) 責任感、自立心の向上 (3) 適職の確認 (4) 大学での学習意欲の向上 (5) 専攻、学習分野での知識の向上 (6) 企業、社会からの評価の確認 <p>◇企業◇</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 人材との新しい出会い (2) 企業・職種に対する理解や知識を高められる (3) より多様な学生を採用する為に企業・事業に対する理解を深められる (4) 斬新なアイデアを吸収できる (5) 求められる人材の質の変化に対応できる (6) 社内の活性化、意識改革のきっかけになる
--

2. アジアンワールド・イン・グランシップの概要と特徴

アジアンワールド・イン・グランシップは、グランシップ開館3周年記念事業の一環として行われた（財）静岡県文化財団の自主企画事業である。大きな柱は、（財）千里文化財団（大阪府吹田市）が運営する国立民族博物館の所蔵品の受託展示であり、2002年8月11日から9月1日までの延べ21日間開催された。展示内容としてアジアに焦点が当てられたのは、近年のアジアブームを受けたものである。書店等でもアジア関係の本が並ぶようになったが、これまで県民が実際にアジアのモノに触れる機会は限られていた。また、国際化社会における文化交流を考える際に、まず近隣のアジア文化から手がけることが考えられた。さらに、企画段階ですでに同年5月31日から6月30日まで、サッカー・ワールドカップの韓国・日本同時開催が決定されており、20都市の開催地の1つに県内小笠山総合運動公園内の静岡スタジアム・エコパが含まれていたことから、県民のアジアへの関心が高まると見越された。

共催・受託者となった（財）千里文化財団は、1983年11月1日大阪北部の千里地域に蓄積された社会的・文化的資源を活用し、国際交流の場や世界的な文化・学術等に接する機会を創出するとともに、その成果を内外に普及する目的で設置された。常勤54人、研究員6名のスタッフを抱えており（総合研究開発機構 2002）、豊かな所蔵品を国立民族学博物館における常設・特設で展示するのみならず、館外での展示も広く行ってきた。すなわち、全国各地での巡回ゼミナールや、近畿圏内で展示・講演・販売・体験を一体化した通称「みんぱく移動博物館」を関西電力協賛のもとで行って来た実績である。このノウハウを生かし、開催期間中の毎日出演者入れ替えで行う音楽や舞踊のコンサート、ワークショ

ップなど、生の体験を取り入れることが計画された。一方、(財)静岡県文化財団は同年3月16日(土)から31日(日)にかけて、子ども主役の遊んで学べるイベント「わんぱく2002」の開催経験があった。その際、静岡デザイン専門学校や染葉学園東海文化専門学校、ルネサンス・アカデミーオブデザインの学生との共同作業を行っている。今回のイベントは、夏休み期間に開催することで、来館者の多くを小・中学生に期待できることから、従来の資料展示のみならず「遊びながら学ぶ」場を提供することがコンセプトに取り入れられた。しかし、両財団にとって、これほど長期間開催する多様な大規模なイベント経験は、初めてであった。

(財)静岡県文化財団は、平成12年度にこの企画を(財)千里文化財団に持ちかけた。以来、両財団各2名の主要担当者を中心に、定期的な打合せがもたれたほか、電話、ファックス、電子メールなどを使って頻繁なやり取りが行われ、実施に向けて綿密な計画が立てられていった。そのなかで、問題となったことの1つがイベント運営にあたるスタッフ確保であった。既述のように、グランシップには登録サポーター(ボランティア)が約180人いる。また国立民族学博物館には、全国に在住する「みんなく友の会」会員がおり、その研究・博物館活動や、みんなくと民族学の普及への支援活動をおこなっている。しかし、展示内容との兼ねあいによって、このイベントに関してはこれらボランティア・スタッフのみならず、アジア出身の留学生や在静外国人の協力は欠かせないと考えられた。こうしたことから、静岡市国際交流協会に依頼し、外国人スタッフの確保が図られた。結果として、静岡大学教育学部の実習生は、両財団スタッフ、異年齢から構成される両財団所属のボランティア・スタッフ、外国人スタッフという多様な経験豊かな運営メンバーとともに、実習に従事することになった。両財団にとっても、こうした多様な人材による事業運営は、テストケースといえるものであった。

イベント全体は、アジアの衣・食・住・音楽・芸能等の文化について展示、参加体験および関連の講演等が、グランシップの展示ギャラリー(写真1)、交流ホール、ホワイエ、映像ホールを使って行われた。

写真1 展示ギャラリー：ブータン



実習生は、展示ギャラリーにおける衣装と暮らしに関する展示とワークショップ、交流ホールにおける芸能や音楽に関する展示とワークショップ、ステージ演奏に関わることになり、とりわけ大部分が音楽を専攻する学生であることから、後者に重点がおかれた。

展示とワークショップは期間中常設であるが、ステージ演奏はモンゴル(2グループによる楽器アンサンブル)、インド(南インド古典舞踊およびシタール演奏の2種類)、インドネシア(アングルン演奏ワークショップ、影絵劇、現代舞踊、バリ・ガムランのワークショップ、ジャワ・ガムランのワークショップの5グループ、ネパール(踊り)、イラン(サントゥール演奏)、日本(草笛、和太鼓の2種類)、韓国・北朝鮮(サムルノリと朝鮮舞踊の2団体)、中国(2グループによる楽器演奏)と多種多様な内容からなっていた。また、出演者のレベルも、プロフェッショナルな演奏家からアマチュアの留学生まで、入り混じっていた。ステージの設営等に関しては(財)静岡県文化財団が行い、出演者の選定や演目等に関する交渉は、(財)千里文化財団および(財)静岡県文化財団の依頼を受けた静岡市国際交流協会が行った。

3. 実習の準備

実習計画は、実習生の振り分けとイベント内容に関する事前学習方法の策定から行う必要があった。実習生13人のうち、12人の芸術文化課程ないし音楽教育専修の3年生は、アジアの音楽についてこれまで学んだことがなかった。むしろ、残り1名の数学教育専修の4年生は、個人的に韓国留学体験やアジア旅行体験があり、問題がほとんどなかった。ステージ演奏の運営業務には、観客の導引やステージ内容に関する質問に答えることも含まれる。振り分けと事前学習との両面を考慮した上で、効率的に準備を進める必要が生じた。

実習期間については、他の博物館での実習期間を考慮して各自6日間を必須としたほか、これ以外の日にもボランティアとして参加可能にした。実習日の設定については、イベント期間中の6日間に絞込み、全員がその日に従事する方法も考えられた。しかし、身近なところでこれほどのヴァリエーションに富んだステージ公演が行われる機会は極めて希少であるし、実習生個人が関心の高いイベントを選択することによって、より成果を高めることが期待できる。しかし、6日間の実習日について文化的に関連性の低いステージを選択した場合、事前学習の負担が増大し、十分な成果が得られない可能性がある。以上をふまえて、当該の音楽・芸能の伝承されている地域とステージ開催日を軸に、ステージ内容をこちら側で8通りにグルーピングし、実習生各自に関心の高いグループを選択させ、ほぼ均等数の実習生が配備するよう調整を行った。

これと平行して、事前学習用の一次資料作り作業に取り組んだ。ステージ内容は、各地域の音楽芸能として日本でもよく知られているものであったが、知識のない学生にとっては学習方法すらわからないと考えられた。とはいえ、実習中はスタッフとしての最低限の基礎知識が求められる。また、各実習生の知識をある程度の基準以上にしておく必要がある。時間割上組み込まれていない実習科目であることから、全員を一時に集合させることは極めて困難であった。そこで、(財)静岡県文化財団から受け取ったイベント題目を頼りに、入門的知識をA3の用紙一枚にまとめた一次資料を作成することにした。また実習の注意事項を徹底させるために、担当教官である筆者とそのゼミ生3人、筆者の研究補助をしている2人の学生の協力により、『実習の手引き』を作成することにした¹⁾。

しかし、こちらから資料提供するだけでは自主的な事前学習とはいえない。また、資料に頼っているのは、観客への説明を十分行える力がつかない。そこで、一次資料を各自がA4一枚に自分の言葉でまとめなおすことを事前学習の課題とした。このように、オリジナルの情報を一元化することで、ある程度知識の均衡を図ったのである。さらに、提出させた事前学習課題のなかから、イベントごとに1種類を選択し『実習の手引き』に綴じこむことで、各人の実習対象以外のものについても知識を共有させた。

4. 実習の記録と成果

以下は、実習終了後の9月18日に(財)静岡県文化財団側の6名²と筆者で行った実習反省会での報告、および学生の実習日誌、実習レポートをもとにまとめたものである。実習は、まずイベント開始前日の8月10日(土)夕方の事前説明会に参加することから始まった。展示物のセッティングが完了したこの場で、初めて両財団スタッフ、実習生、ボランティアスタッフ等その他の運営スタッフが一同に会し、展示会場の案内と接客に関する注意事項などが伝達された。実習生は、見慣れない展示物に圧倒される場所もあったが、財団スタッフの説明には真剣に聞き入っていた(写真2)。

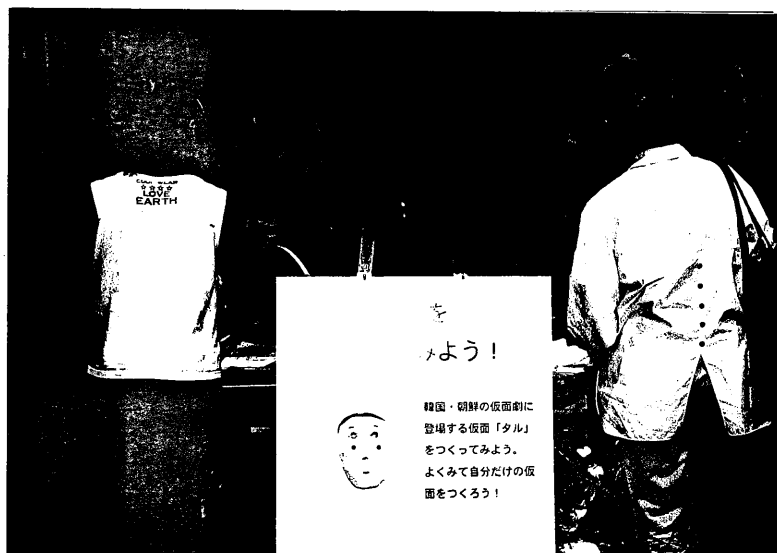
写真2 事前説明会



実習開始後の経緯については、(財)静岡県文化財団スタッフが次のように報告している。まず、実習開始当初は、実習生には何をしたらよいのかという不安や戸惑いが見られた。また、自ら仕事を見つけられなかったため、一日が長く感じられたようであった。その反面、日頃目にする機会のない珍しいステージに夢中になり、友達と話す場面もあった。ワークショップも、自分たちが楽器作りや仮面作りの技術を身につけたり、それを自分たちが楽しむのに精一杯であった。しかし、回数を重ねるにつれて製作技術が向上し、個々人が工夫を加えるようになってきた。たとえば、仮面作りでは装飾付きの仮面が製作されるようになった(写真3)。

同時に、観客からはスタッフの一員としての動きを要求されることに気づきはじめ、周囲の気配りができるようになっていった。ワークショップではカッターナイフを使用したため、子どもがケガをする危険もあったが、誤って子どもが切り傷を作ったときには財団スタッフに細かい報告も行っていった。イベントの進行によって休憩時間がずれても、不満の声をもらすものもおらず、実習予定時間を過ぎても掃除の手伝いをするなど、積極的に仕事をするようになった。こうした実習生の変化を見取った財団スタッフは、ステージの司会進行役やステージ出演、民族衣装を身につけての公演への観客呼び込みなど、一部の実習生により高い接客技術を要する業務を体験させた。こうして、実習生は最後には自分から仕事を見つけるようにまでなっていた。

写真3 ワークショップ：仮面作り



一方、学生の受け入れによって財団側にもたらされたメリットもあった。財団スタッフからは、「実習生の意欲的な取り組みによって、『いまどきの学生』のマイナスなイメージが覆えされた」、「実習生—スタッフ双方が、実習回数を重ねるうちに提案し合えるようになった」、「実習生からの意見には、観客とスタッフ両方の立場を見据えたものも含まれていて、新鮮に聞こえた」、「時間とともに作り上げていくという、イベントの本質性を掴んだ意見も聞かれたことが印象的だった」などの感想が聞かれた。このように、実習は学生の「責任感、自立心の向上」を促したのみならず、財団にとっても「新しい出会い」をもたらし、彼らから「アイデアを吸収」するとともに、業務への「理解や知識を高める」機会となったのである。

学生のレポートでは、受け入れ側のイベントにおける対応のよさといった技術的なものだけでなく、スタッフの気遣いやその人格に対する賞賛などが目立った。学生は、実習を通じてイベントに関わる学芸員の仕事が、時間と共に「物を作り上げていく仕事」であり、「人間相手の仕事」であると知った。相手となる人間は、観客のみならず他のスタッフも含まれる。イベントを成功させるためには、スタッフ同士のコミュニケーションがうまくいくことが必須であり、そのことが直接観客に与える影響が大きい。多様な人々からなるイベントの場において、コミュニケーションを円滑にするために、スタッフはさまざまな気遣いをしている。それができるスタッフのすばらしい人格に触れたこと自体が大きな経験であり、自分の自分の仕事に対する態度を考えさせられた、という意見もあった。

「人間相手の仕事」という点で、「教育実習に通じる」実習だと感じた学生もいた。学生にとって、このイベントは幼児から中学生くらいまでのさまざまな年齢からなる子どもと触れ、学校の外でのいろいろな子どもの姿を見る機会となったし、実習では経験できない保護者との接触の場ともなった。「アジアの音楽や文化について勉強になった」というイベント内容に関する感想もあったが、学生にとっては、「どんな職業にも通じる」ようなコミュニケーション能力や、気遣いのできる人間となることを目標化できたことが、最も大きな収穫だったのである。

5. 今後の課題

本実習は、音楽を専攻する学生にイベント運営にスタッフとして参加する機会を与えることによ

り、学芸員という職業の可能性を示すと共に、即応性などの能力を芽生えさせることを目標に設定したものであった。ところが、学生はそうした表面的な職業上の技術ではなく、それを支えるスタッフの生き方に大いに触発され、それが職業に対する意識を高めるものとなったのである。このように、人間同士のコミュニケーションが強く求められるイベント運営に関する実習は、専攻を問わずすべての学生が将来を考えるうえで非常に大きな力を与えるものである。とりわけ、教育現場に立つことを目指す学生にとっては、この経験が将来直接生かされる可能性がある。実際、教育実習では体験できない保護者との接点の場ともなった。

一方、(財) 静岡県文化財団は、本実習を「若者にグランシップの文化事業を理解してもらおうきっかけ」とし、その結果が「地域振興」へと結びつくよう継続的に行っていくことに期待をよせている(青木義尋・(財) 静岡県文化財団参事兼企画制作課長、2002年9月)。実際、実習生の何人かは、その後もグランシップ主催のイベントに積極的に参加するようになった。しかし、これを持続可能な実習とするには、実施側にいくつかの課題がある。ひとつは、学部内での実習サポート体制の整備である。さきに述べたように、本実習は音楽教育講座が開講し、担当教官の責任によって行った。しかし、万が一の事故が起こった場合には、担当教官が責任を負うにはあまりにも重い。また、時間割に組み込まれていない授業であるため、事前指導・事後指導がやりにくい。そのうえ、受入先との交渉や打ち合わせすべてを担当教官が授業時間外に行わねばならず、その時間的負担も大きい。講座として開講することの限界もある。他専攻の学生にもメリットが大きい実習であるにもかかわらず、講座主体であると目につきにくく、また希望者がいたとしても連絡がとりにくい。逆に年度によって希望者数が減少すれば、開講の見通しが立たなくなる。さらに欲をいえば、実習のあり方も今後改善していく余地がある。本年度のように、イベントがセットされたところに実習生を送り込むのではなく、その企画段階から宣伝・広報、運営というイベントの生成すべてに関与することにより、イベント作りのむずかしさと喜びをより深く味わえる。そのためには、2年度にわたる実習とするなどのカリキュラム改正について検討していく必要がある。

引用文献

財団法人静岡県文化財団『GRANSHIP 静岡県コンベンションアーツセンター』(施設案内パンフレット) n.d..

関東地域インターンシップ推進協議会『2002年度(平成14年度)KIPCインターンシップのしおり』(リーフレット) 2002.

総合研究開発機構「財団法人千里文化財団」<http://www.nira.go.jp/icj/tt-you/1259.html> 2002.

-
- 『実習の手引き』作成協力者、渥美佐織(学校教育教員養成課程3年)、佐々木勝康(大学院教育学研究科1年)、柴田織江(学校教育教員養成課程3年)、寺崎庸(芸術文化課程2年)、長谷部まおり(学校教育教員養成課程3年) 各人には、感謝の意を表したい。
 - 財団側からは、青木義尋参事兼企画制作課長、企画制作課の野毛、富田、河口、内山、森各氏が同席した。